

## ②・② 調査方法

分類群	調査時期	調査方法
植 物	平成23年秋季～平成25年春季 (春季・夏季・秋季)	調査箇所ごとに確認された植物種をすべて記録した
ほ乳類	平成23年冬季～平成25年春季 (春～夏季・秋～冬季の2期)	フィールドサイン調査、トラップ調査(ネズミ類)に加え、他分類群の調査で確認された種も記録した
鳥 類	平成23年12月～平成24年11月 (毎月1回)	ラインセンサス法などにより、確認された種を記録した
は虫類	平成24年春季～平成24年秋季	目視調査、フィールドサイン調査に加え、他分類群の調査で確認された種も記録した
両生類	平成23年早春季～平成24年秋季	目視調査、鳴き声調査、卵塊数調査に加え、他分類群の調査で確認された種も記録した
魚 類	平成23年秋季～平成24年秋季 (春～夏季・秋～冬季の2期)	投網、手網、カゴ等を使用したサンプリング調査によって、捕獲された種を記録した
昆虫類	平成23年秋季～平成24年冬季 (毎月2回程度)	樹林地、草地、水辺、海岸の4つの環境ごとに選定した指標種、重要種について、目視調査、及び任意採集法で確認種を記録したほか、3箇所でライトトラップ法などによる調査も行った
魚類以外の水生生物	平成23年秋季～平成24年秋季 (春～夏季・秋～冬季の2期)	手網等を使用したサンプリング調査のほかに、魚類調査時に確認したものを記録した

フィールドサイン調査	調査地内をできるだけまなく踏査して、フィールドサイン(糞、足跡、食痕、巣、爪痕、もぐら塚や坑道など)から、生息する動物種を確認する調査法。
トラップ調査	代表的な環境ごとに餌を置いたトラップ(わな)を仕掛けて、小型ほ乳類を捕獲し、生息種の同定や個体の計測等を行う調査法。
ラインセンサス法	設定したルートに沿って鳥類の姿や鳴き声により生息状況を確認する調査法。 (今回の観察範囲は片側25m両側50m)
任意採集法	昆虫類を捕虫ネットを用いたり、手で直接採集する調査法。
ライトトラップ法	夜間に灯火に集まる昆虫類の習性を利用して採集する調査法。
サンプリング調査	ある集団からその一部を抜き出す調査法。

## ②・③ 前回調査との違い

今回の調査の大きな特徴のひとつは、市民が直接、調査全般に関わり、中心的な役割りを果たしたことです。本市の自然環境の保全のためには、市民を含む多くの主体との協働が極めて重要になると考えるからです。

そのうえで、調査方法や調査体制が変更されても、前回調査に参加した調査員が調査地の変化等の考察を行い、調査の継続性を確保しています。また、今後実施する調査に備え、調査方法、調査ルート、調査地点等の標準化を図りました。

## ②・③・① 調査体制・方法における変更点

変更点を表にまとめました。調査全般にわたり市民、市民団体、大学、神奈川県関係機関及び藤沢市の協働で実施し、現地調査実施者数の合計は80名、調査実施日数は延べ687日を要しました。調査箇所は、ビオトープネットワーク形成上重要となる水田等を追加し、前回調査の33箇所から、48箇所に増やしました。

調査体制・調査方法における変更点		
	前回調査	今回調査
① 調査主体	専門業者が主体 (市民、大学、団体は協力)	市民、大学、団体が主体 (専門業者が協力)
② 市民の参加状況	調査のみに参加	調査、及び評価に参加
③ 調査対象(陸域)	樹林地を中心に調査 (水田は樹林地に隣接した場所のみ調査)	樹林地のほか、ビオトープネットワーク形成上重要となる独立した水田を追加
④ 調査箇所数(陸域)	33箇所	48箇所

## ②・③・② 新たに実施した項目

藤沢市の自然を里地・里山・河川・海を連続し、関係しあう空間としてとらえ、次の項目を新たに加えて、陸域の保全に役立てるようにしました。

- 「調査で確認された生物種一覧」のとりまとめ
- 分類群ごとに抽出された「指標種」「重要種」を用いた緑地の評価
- ビオトープネットワークの視点による整理
- 海域生物の生息状況の把握
- 生物種情報データベースの構築